競馬術通信 VOL.1

~シンプルトレーニング~

JRA 馬事公苑　北原広之

「普段みなさんは、どのようなプランを基に馬の調教をおこなっていますか？そして、その調教プランとは明確ですか？」

このことを明言できるようになるには、多くの失敗や苦悩およびチャレンジし、時には遠回りして初めて得られることもあります。

ここでは、「競馬と馬術の融合」という意味で、「競馬術」という造語のタイトルを付け、私がこれまで試してきたことや失敗例も含めた多くの事例をもとに、馬の調教について考えたいと思います。

馬術と競馬は関係ない！？

「馬術と競馬は関係ない！」と考える方がいらっしゃることでしょう。私もそれに賛成ですが正確に言えば、「正しくない馬術と競馬は関係ない！」と考えます。

では、「正しくない馬術」とはどういうことでしょう？例えば、「外見だけのハミ受け」です。そもそも「ハミ受け」と聞くと、我々の意識は馬の口向きや頭頸の形に注目しますが、本来の「ハミ受け」は、後肢から生み出される前進気勢があって成されるものです。その考えがなく、騎手の拳を左右に抜き差し、形だけの屈撓（くっとう）を求めてしまうことは非常に危険です。（詳細は Vol. 2）

競走馬が速く走るためには、**後ろ肢から生み出された推進力がハミまで到達して馬体全体を伸展させ、重心を前へ移動できなければなりません。**しかし、誤ったハミ受けでは推進力が項（うなじ）で止まってしまい、馬体が最大限に伸展出来なくなってしまいます。このように、誤った方法を競走馬に取り入れることにより、その馬が持つ能力が発揮されなくなってしまいます。

馬術の中でも特に馬場馬術（ドレッサージュ）は、馬が騎手の扶助に従順かつ反応しやすい体勢を作り、口向きや馬体の歪みを矯正し、能力を最大限に発揮することが目的です。

ここでは、こうした馬術技術の一部を競走馬に利用していく方法を明確にしていきたいと思います。

今後の進め方として、以下のプランを立てました。色々なテーマを打ち出しながら継続していきたいと思っております。

１．競走馬に必要なハミ受けとは（Vol.1）
２．正しいハミ受けのメリット（Vol.1）
３．誤ったハミ受けのデメリット（Vol.2）
４．ハミ受けの調教方法（Vol.2）
５．ハミ受けを避け頭頸を上げる馬への対処法（Vol.3）
６．頭頸を下げてバランスを前へ崩す馬への対処法（Vol.4）
７．ハミ受けと透過性からセルフキャリッジへ（Vol.5）

※カッコ内は予定です

写真 1

１．競走馬に必要なハミ受けとは？

最近は、競馬の世界でも馬術で用いられる「ハミ受け」が導入されているようです。しかし、この馬術に求められている「ハミ受け」を単純に競走馬に用いることは果たして正解なのでしょうか？

一言で「ハミ受け」と言っても、馬体全体の収縮度との関係を忘れてはなりません。外見上、馬の頭頸が屈撓していれば、それが「ハミ受け」というのは間違いです。そこに後躯からの推進力と、それを受けた馬体の収縮度および透過性などが関連して、初めて屈撓（写真１）の体勢になります。

しかし、究極の収縮を求めない競走馬では、馬術的な屈撓をした「ハミ受け」までは必要ありません。ここまでの譲りを常に求めてしまえば、馬体を最大限に伸展させる場合に弊害になる可能性があります。

写真 2

競走馬に必要な「ハミ受け」は、馬体の伸展に影響されないことが最大の条件になります。つまり、過度の屈撓（写真 2）をすると、後肢からの推進力がハミまで到達せずに項で折れて止まってしまい、競走馬に必要な馬体の伸展ができなくなります。

屈曲の程度などは、外見上の角度ではなく、騎手と馬との間に確立される関係性が“競馬で求められるハミ受け”となります。それは、馬に騎手の意志が伝達でき、馬もそれに応えることができる関係性が存在していることです。

最も重要視するべきは、**ハミ受けではなく馬のバランスです。さらに、後ろ肢から生み出される推進力が馬体を通りハミまで到達して伸展できる透過性です。**

下の写真では、馬を屈撓させずに、推進力がハミまで到達して頭頸が伸展し、全身を使って動かしています。写真３の体勢でもハミ受けは存在しているのです。ハミ受けは、人馬の意思疎通ができる大切なコンタクトであり、馬が自分でバランスを保つ姿勢へと導きます。

２．正しいハミ受けのメリット

様々な議論があることは承知していますが、前述した通り、ハミ受けは騎手と馬とのコミュニケーションツールです。

競走馬に「待て！まだ走るな！」と手綱を控えても、馬がそれを無視して全力で走った場合、騎手は更に強く手綱を引きます。馬は、頭を高く上げ口を割り、背を反り走りづらい体勢になりながらようやく減速します。この過程に騎手と馬の間に意思疎通が存在しないことは明らかであり、お互いに体力の大きなロスが生じます。このロスを無くすためにハミ受けが大きく役立ちます。

また、馬が走るためのベストな体勢を作るためにもハミ受けは役立ちます。写真４のような体勢では背中を硬くして全身を柔らかく使って走ることができません。当然後肢の踏み込みも浅くなり速く走ることが出来ないだけでなく、馬体に故障を起こす原因にもなります。そうした誤った体勢を正しく矯正する場合にも「ハミ受け」が役に立ちます。

ハミ受けの調教方法については、次号で詳しく考えて行きます。

競走馬に起こる問題	解決法	ハミ受けのメリット
騎手の扶助を無視して引っかかる	→	馬体をリラックスさせられる（緊張の緩和）
手綱を控えると頭を上げて背を反る	→	馬体全体に柔軟性を生み、後肢の踏み込みを促す（前進気勢の創生と透過性）
走ることに集中しない（物見など）	→	騎手の意志を馬に伝えることができる（コントロール性）
馬体の歪み、左右の口向きの違い	→	騎手の扶助に応えられる体勢と反応（リバランスと従順性）

北原広之（きたはら　ひろゆき）

1971 年生まれ
日本中央競馬会　馬事公苑所属

私は８歳で初めて馬に乗り、学生馬術を経験した後 JRA に入会しました。馬事公苑をベースにして馬場馬術を専門に 20 年以上馬術競技選手として活動し、全国各地で講習会を通して指導を行ってきました。その中で様々なタイプの馬に多く出会い、それぞれが抱える問題を解決するために、その担当者と一緒に考えて解決への糸口を見つける努力を繰り返してきました。

馬場馬術では、口向きの悪さ、真っ直ぐ走らない、背中を使わせてトモをもっと踏み込ませたい！などの問題が多く、その馬の持つ可能性を最大限に引き出すトレーニングを行ってきています。

競走馬は、走るという本能を常に研ぎ澄ましていかなければなりません。年齢も若く、調教が馬に十分に理解される前にレースに出ていくケースも多いと思います。そういった場合、騎手が馬と意思疎通ができないために、馬の体力にロスが生じてしまいます。騎手が出す扶助を馬が理解して直ぐに反応できれば、それに越したことはないはずです。待て！と指示を出せば馬自身で馬体に力を溜めるように待つことは、余程良く調教され、賢い馬でなければあり得ないことです。しかし、馬との折り合いを付けるための調教を行っている馬と、全くそういった調教を行わない馬とでは、必ず差が出てきます。

馬術用競技馬も全てトップホースになれるわけではありません。しかし、我々はその馬のベストを引き出すための技術を持つ努力を続けていきたいと思うはずです。

今後は、様々な角度から馬の背の上で調教できる方法をプロフェッショナルの皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

次号 Vol.2 予告

- **誤ったハミ受けのデメリット**
- **ハミ受けの調教方法**

について詳しく解説します。